

平成 28 年度第 1 回 京都市市民参加推進フォーラム 摘録

■開催日時：平成 28 年 6 月 16 日（火） 午後 6 時～午後 7 時 30 分

■開催場所：ウィングス京都 2 階 セミナー室 A

■議題：

- (1) 市民参加推進フォーラムの平成 28 年度の取組について
- (2) 平成 28 年度第 1 回市民公募委員サロンについて

■報告事項：

- (1) 新たに設置された附属機関等について
- (2) その他

■公開・非公開の別：公開

■出席者

市民参加推進フォーラム委員 12 名

荒木委員，内田委員，太田委員，兼松委員，川島委員，芝原委員，杉山委員，
竹内副座長，津田委員，樋口委員，壬生委員，吉川委員

【傍聴者】

4 人

【特記事項】

動画共有サイト YouTube（ユーチューブ）による会議のインターネット中継を実施

【議事内容】

1 開 会

2 委員自己紹介

3 座長選出・副座長指名

<事務局>

昨年度末で永橋座長が委員を退かれたので，新たに座長を選出する必要がある。京都市市民参加推進条例施行規則第 9 条の第 2 項で「座長は委員の互選により定め，副座長は委員のうちから座長が指名する」となっている。

※以下のとおり、座長、副座長が選出された。

座長：壬生 裕子

副座長：川島 ゆり子， 竹内 香織（2名）

4 座長・副座長挨拶

<壬生座長>

フォーラムに去年1年間参加し、とてもいいと思ったところは、委員の一人一人がざっくばらんに言いたいことをきっちり言うが、一方でとても前向きな議論をするところである。なかなかそういう雰囲気を作れている委員会は珍しいと実感している。

今年度もお二人の副座長に支えていただきながら、そういう雰囲気を引き続き作っていききたいと思うので、御協力の程、よろしく願いしたい。

<竹内副座長>

フォーラムで議論するに当たり、実は、事務局の御尽力も大変なものがある。資料の準備だけではなくて、一人一人の委員とのコミュニケーションを大事にさせていただいており、今後もそれを大切に引き継いでいきたいと思っている。また、フォーラムは、議論だけでなく、事業などを行うこともある。それも誰か一人が無理をして行うのではなく、支えあって皆さんのお力で進めていけたらと思うので、ぜひ、やってみたいということがあれば、お力を貸していただきたい。御協力の程、よろしく願いしたい。

<川島副座長>

私は、このメンバーであれば大丈夫だと思い、副座長をお受けした。今の委員の方だけではなく、歴代の委員の方々も含め、本当に皆さんが京都市をよくしていこうという思いを一つにされて、自分の役割以上のことを務めてくださっている。時々しんどいところもあるが、それでも楽しく、やりがいがあるから、皆さんが力を合わせてやってくださる。みなさんのお力添えがあると信じているので、どうぞよろしく願いしたい。

5 議題

議題（1）第2期京都市市民参加推進計画の改定について

<壬生座長>

議題1「市民参加推進フォーラムの平成28年度の取組」について、資料1から資料3をまとめて事務局から説明お願いしたい。

<事務局>

（資料1「市民参加推進フォーラム活動の概要」について説明）

略

(資料2「市民参加推進フォーラムの平成28年度の取組について(案)」について)

今年度フォーラムで議論する内容について、議論いただきたい。

まず「1(2)フォーラム会議で議論する内容について」の「ア」である。昨年に策定した「第2期市民参加推進計画改定版」には、「附属機関『市民参加推進フォーラム』において、計画推進に関する成果や課題を分析し、数値を用いるなどわかりやすい形でホームページで公表をする」ことを掲げている。その記載の元となるフォーラムからの提言書には、「市民が市民参加の現状を知って、効果を実感することで更なる行動促進につながるよう、市民参加の進捗状況をわかりやすく市民に示すべきである」と記載されている。

こうしたことから、今年度は、フォーラムにおいて、第2期市民参加推進計画改定版の推進に関する成果や課題等を分析すること、またその分析方法の検討をお願いしたい。

「イ」は、メールマガジンについてである。「職員のための市民参加推進の手引き」について、26年度、27年度に議論して作っていただき、完成間近ではあるが、未完成である。この内容を再度お諮りしながら、分割して、京都市の職員向けにメール配信等を行っていききたい。

(資料3「第2期市民参加推進計画改定版の推進に関する成果や課題等の分析について」)

計画の推進に関する成果や課題等の分析について、具体的に説明させていただく。

目的は2つあり、1つ目は、「計画の成果や課題等を庁内で共有し、次年度以降の事業計画にいかすことにより、計画の着実な推進を図る。」こと、2つ目は、「市民に京都市の市民参加の現状や成果を伝え、市民参加の効果を実感してもらうことにより、市政への信頼度の向上や、市民のさらなる行動促進につなげる。」ことである。

手法として、2案提示しており、この部分を特に議論いただきたい。

案1は、毎年、施策の一部を分析し、第2期計画改定版の計画期間(5年間)をかけて全ての施策を分析するものである。平成28年度については、基本方針1について、分析を試行的に行いながら、分析方法を検討していただく。29年度からは、基本方針2及び3を分析いただく。

分析の流れとして、まず、事務局が施策に関係する各局・区等の事業や取組を取りまとめ、その資料を基に、フォーラムにおいて、効果的に行われている取組や不足している取組などを分析していただく。資料での分析だけでなく、特徴的な取組を行っている部署や施策の推進に当たり中心的な役割を担う部署などにヒアリングをしていただくことも考えている。

分析結果のイメージとしては、進んでいる取組などを、他の事業に応用できるのではないか、といったようなご提議をいただきたいと考えています。

案2は、毎年、第2期計画改定版に掲げる全ての施策(19施策)について、本市において自己評価を行った上で、フォーラムにおいて他者評価を行うものである。

事務局としてはより深く議論していただくために、案1がよいと考えている。

<壬生座長>

「第2期市民参加推進計画改定版の推進に関する成果や課題等を分析」する方法として、2案提示いただいた。これに対して、意見をお聞きしたい。

<竹内副座長>

補足説明をささえていただく。昨年度の議論の中で、「この計画に沿ってどのように効果的に事業が行われていくのかを、しっかりと分析していくべき」ということが言われていた。事務局案は、その分析方法も含めて、今年度に議論するというものである。

<川島副座長>

案1、案2それぞれいいところと、使いにくいところがあると思うが、事務局として案1を勧められる理由について、もう少し説明をお願いしたい。

<事務局>

案2は、全ての事業について、毎年、自己評価した後、皆さんに他者評価をしていただくものであるが、1つの施策について深く議論いただくことがなかなか難しいと考えている。

案1は、毎年度いくつかの施策に限って分析いただくものであり、施策ごとに、きめ細かく議論いただけると考えている。

<芝原委員>

5年間のスケジュールが提示されているが、来年度以降にスケジュール変更は可能か。また、来年度以降、フォーラムでやると決まっていることは他にないか。

<事務局>

5年間のスケジュールは仮のものであり、今年度、試行的に分析いただいて、その後のスケジュール変更は可能である。少なくとも5年間で計画の全体が評価できるように進めたいという趣旨である。

来年度以降については、「職員の手引き」などの改定作業が発生する可能性はあるが、大きく新たに取り組んでいただくものは、今のところ想定していない。

<川島副座長>

5年後に急に第3期計画を作るわけにはいかず、3年後ぐらいまでは施策ごとの分析をメインにするとしても、4年目あたりからは計画策定の準備を始めないと、間に合わない可能性がある。

<内田委員>

案2は、評価の手法としては定番という印象であるが、案1の方は、計画の進捗を分析する手法も併せて考えるということによいか。他の自治体に取り組んでいる事例はあるか。

<事務局>

政令指定都市をいくつか調べたが、案1のように深く分析している例は見つからなかった。案2に近い形で行っている例はあった。

<樋口委員>

案1を採用するのであれば、3年目までに一通り分析を終えて、そこで、方向性が合っているかどうかを確認し、4年目、5年目で次の計画の策定に向けて検討するというスケジュールがいいのではないか。

また、「計画を着実に進めるための推進体制」については、行政内部のことなので、最後2年間だけでなく、毎年、分析を行った方がよい。どのような変化があったのか、毎年、市民に分かってもらう方がよい。

<兼松委員>

案1は深く議論できるという説明であるが、何を持って「深掘り」と言うのか、もう少しイメージのすり合わせが必要である。

また、「評価」という表現は、敵対のイメージがある。私は事業のよい所を探す「ほめる会」にしたい。フォーラムでほめられたことが、市職員の皆さんの実績になり、人事制度などに反映されるようになれば、市職員のモチベーションがあがると思う。

<事務局>

分析の流れや分析結果のイメージなどは、あくまで案である。

案2は、全国的にもよく見られるパターンで、「評価」というイメージである。

案1の方が、市の事業について、どこがよかったのか、どうやって他の施策につなげていくのか、という前向きな議論をしていただけたらと考えている。

<兼松委員>

ユニークなケースや、イノベーションが起こったケースを、分析したい。

<竹内副座長>

案2は、施策の進捗について、全体のバランスを見るのには分かりやすい。

案1の方は、例えば、スマートフォンアプリを市民参加で作ったことについて、参加者

の規模、どのような意見が出て、どう反映されたのか、などを聞くことができる。その上で、私たちが、アプリづくりに市民参加がどのように影響したのかというのを、最後に、コメントするというイメージである。

京都市の中での熱い事業、面白い事業を事務局から提案いただき、私たちが深く聞いたうえで、「その部分を他の部局にも、市民にも知ってもらおう」と思い、取りまとめることが、使命であると感じている。

<兼松委員>

分かりやすい説明で、イメージが湧いてきた。

<川島副座長>

個人的なイメージであるが、案2は、行政の方の専門職の方が作ったものを、評価委員会もまた専門職のような人が並び、評価するというイメージである。

フォーラムは、市民の方や、NPOの方など、多様な方が委員となっており、また、「市民参加はこんなに面白い」と市民に広める役割があるにも関わらず、専門職の人が内輪で話しましたという内容で公表をしても、「わからない」といわれるのではないか。

そうではなく、私たちがワクワクしそうな事業を選び、その事業の担当者に話を聞いて、「こんなに苦労したけれど、こんなに人数が増えた」、「分かってくれる人がこんなに増えた」といった生の声を聞きたい。そうすれば、「市民参加によって、こんなにいいことが起こった」ということを、私たちが自分たちの言葉として伝えることができる。

面白い事業、苦労している事業、ちょっと失敗した事業でもよいので、京都市から「評価してほしいからちょっと聞いてください」と言っていたら、それを私たちが聞いて、見て、感じて、専門家ではない私たちが分析をして、すごくいいと思ったとしたらグッドをつけていいと思う。

<兼松委員>

泣ける！とかでもよい。

<川島副座長>

泣ける！とか、心ふるえる！とかでもよい。

そういうことを伝えるのが市民参加のスタンスである。

むしろ、私たちの私的な感情も込めて分析するという方法で、案1を採用すればどうか。

<荒木委員>

おっしゃる通りである。私は教師であったが、学校で言えば、案2は、全体評価5段階で点数をつけるもの。案1は、例えば、国語で「読む力」「書く力」などについて、ここう

をもうちょっと頑張りましょう、という風に観点別に見ることができるため、案1がいい。

<太田委員>

おっしゃっておられるように、市民の方が見時に、わくわくして「参加したい」と思える方が、市職員もやりがいがあると思う。

<杉山委員>

お話を聞くなかで、評価をする姿勢などは、案1の方が分かりやすいと感じた。ただ、分析方法のイメージがつかみづらく、どうやって評価や分析するのかよく考えないといけない。

<津田委員>

字面で見るとイメージが湧きにくいところがあるが、やり方はこれからいろいろ揉めばいい。今までとは違う形でやってみようというのはすごくいいと思う。

<吉川委員>

そもそも資料自体が市民目線に立っていないと思う。書面だと分りにくくなるということはあるかもしれないが、案1と案2の違いがわかりやすいように、説明などで工夫していただけたらありがたい。

<芝原委員>

やり方はいろいろあるだろうが、分析結果を市民にわかりやすく発信するということも確認しておきたい。

<川島副座長>

案1の場合、資料では、フェーズ1を分析する年度、フェーズ2を分析する年度と、年度により分析する施策が異なる。担当部署へのヒアリングや資料の読み込みが必要であり、1年で全ての施策を分析することが難しいため、このような案になっているというのは理解するが、一方で、この方法では、成長があまり見えにくい。

事務局案は、フェーズごとに順番に分析するというものだが、全てのフェーズについて毎年分析するという案も考えられる。

<兼松委員>

毎年、全てのフェーズを分析した方がいいと思う。

フェーズ1の分析を平成29年に行った場合、もし平成31年にフェーズ1の面白い事業があった場合、それは漏れ落ちてしまう。

これだけの人数がいて、興味があることも違うかもしれないので、全員でそれを見るのは多すぎるかもしれない。部会に分かれることなども考えられる。

<壬生座長>

昨年のように部会を作って議論をすることもできる。ただし、その場合、事務局の作業量はどうか。

<事務局>

部会を作ることはありえると思える。深く議論するために、どのような方法を取るかが大事だと思う。

<壬生座長>

皆さんから様々な意見が出たので、一度持ち帰って事務局と座長、副座長で調整し、次の会議のなかで、経過も含めてご報告するというところでどうか。

<竹内副座長>

案1をベースに、単年度ごとに分析結果を発信する、事業のよいところを探すということが共通の認識であった。この他、3年ぐらいで一区切りとする、推進体制については毎年分析する、毎年、部会に分かれて全フェーズを分析するなどのアイデアが出た。そこを受けて、具体的にどういうスケジュールで行うのか、事務局と、座長・副座長で相談して、次回の会議を迎えるということによいか。

<壬生座長>

初めての試みであり、やってみないと始まらないので、皆さんの御協力をお願いしたい。

議題（2）平成28年度第1回市民公募委員サロンについて

<壬生座長>

議題2「平成28年度第1回市民公募委員サロンについて」事務局から説明をお願いしたい。

<事務局>

（資料4「平成28年度第1回市民公募委員サロンについて（案）」）

公募委員サロンは、「本市の設置する各附属機関等に在籍する市民公募委員の交流を深めるとともに、それぞれの附属機関での経験についての意見交換をすることで、今後の附属機関委員としての充実した活動につなげる。」ということを目的とし、基本的に、年2回開催している。

今年度1回目は、8月の平日夜、または土日の午後の開催を考えている。対象者は、京都市の54附属機関、104人程度である。

1回目は、外部講師等をお招きして、公募委員の立ち位置ややりがいなどをお話いただき、そのあと交流会を開催してはどうかと考えている。2回目については、年度終盤の3月頃に、1年間を振り返っていただくのがよいと考えている。

1回目の外部講師については、市民参加推進フォーラムの歴代の座長、市民参加推進フォーラムの委員の方々、複数の市民公募委員をこれまで経験された方などを候補として挙げている。

また、公募委員だけではなく、附属機関等の所管課の職員にも参加を呼びかけて、職員の学びの場にもしたいと考えている。

<荒木委員>

附属機関とは具体的には何を指すのか。

<事務局>

大きく分けると2種類ある。1つは条例に基づいて設置されている「附属機関」で、学識者や市民の方から意見をお聞きする場であり、このフォーラムも「附属機関」である。もう1つは、条例ではなく、要綱で設置されている懇談会などがある。この2つを併せて「附属機関等」と呼んでいる。

市長から様々なテーマについて委員の方に諮問をし、意見や提言をいただく場のことが「附属機関等」であると理解いただきたい。

<壬生座長>

公募委員サロンは、附属機関等の市民公募委員の方々が交流し勉強する場であり、また併せて市への意見を聞く場でもある。

<兼松委員>

ファシリテーターの案などはあるか。

<竹内副座長>

ゼロベースで考えていただきたい。

このフォーラムの市民公募員の方も、公募の情報を見て、レポートを書いて、選ばれ、説明を受けて、今、初めて参加されている。どういう雰囲気なのか、何を言っているのか、自分が今発言するべきなのか、しないべきかなど、戸惑っていると思う。

このような附属機関が他にもたくさんあって、そこに参加している市民公募委員はだいたい1、2人である。そのため、戸惑いを受けていることが多く、他に104人も公募委

員がいるということや、もっと発言していい、自由にいい、ということその場で感じてもらえれば、次のそれぞれの会議で活かせるのではないかという趣旨で、公募委員サロンを開催している。

1回目はそのような位置づけで、2回目は、一年間やってみた感想を聞かせてもらって、よりよい附属機関運営に還元していく、ということを狙いとしている。

<吉川委員>

「あなたたちのような、初めて来られた方が、どういう立場で、発言し意見すればよいか、勉強や交流するために、公募委員サロンがある」と理解した。

<竹内副座長>

そういう意見を出していただくために、兼松委員は、ファシリテーターのことをおっしゃったのではないか。

<兼松委員>

アンケートの結果を見て、26年度の1回目が大変だったと感じる。2回目には、1回目の課題が改善されていてよかったと思う。

<吉川委員>

54附属機関等で104人という数字が出ているが、どこから出た数字か。

<事務局>

京都市の附属機関はもっと多くあるが、その内、公募委員が在籍している附属機関が54附属機関等で、公募委員が全員で104人である。

附属機関等によって、公募委員がいない場合もあるし、このフォーラムのように4名いる場合もある。平均すると2名ぐらいいる。

<吉川委員>

希望すれば、全員が参加する権利があるということか。

<兼松委員>

資料では、定員は20名となっているがどうか。

<事務局>

20人で切ろうという意図はなく、全員に参加する権利がある。できる限り多く参加いただきたいと考えている。

<樋口委員>

以前は100人委員会のメンバーが多かったが、100人委員会は昨年度で終了した。今回、何人ぐらい応募があると考えているか。来てもらう工夫が必要である。また、自分自身が市民公募であるという認識がない人もいるかもしれないので、市民公募委員の人への直接の声掛けも必要ではないか。

<事務局>

確かに来ていただく工夫が必要である。所管課から、郵送やメール案内してもらいが、できる限り声掛けをしてもらい、こちらからも、できることをしていく。抜本的な改善というより、どこまできめ細かくするかということだと思う。

<樋口委員>

以前の公募委員サロンの際に、公募委員を選任していない附属機関を担当する職員が参加され、「市民の人は行政のマイナスの部分も、きちんと受け止めてくれる」ということ新たに気付かれていた。ぜひ、公募委員を選んでいない附属機関の担当職員、特に若い職員に来ていただきたい。

<事務局>

市職員にも、積極的に呼びかける。

<竹内副座長>

参加人数については、場所の問題と、ファシリテーターを入れたときの話しやすさの問題がある。話しやすく少人数でテーブルを作ろうと思うと、そこに進行役1人いた方がいい。進行役としてのフォーラム委員の参加人数も大事である。

<川島副座長>

参加人数も大事だが、何をするかも大事である。過去のアンケートでは「サロンの開催主旨が理解出来なかった」と参加者に言わせてしまった。一度がっかりされてしまったら、二度と来てもらえない。公募委員の方がどういうことを求めているか考えないと、人数集めありきでは、いけない。

<事務局>

同じくアンケートにおいて、「他の市民委員さんと触れ合えた」、「いろんな活動をされている方の話を聞けた」などの、よい意見も多くいただいている。

<竹内副座長>

今後のスケジュールはどうか。

<事務局>

今回の会議については、市民参加推進計画の状況について分析をしていただくために、各局の状況を取りまとめる必要があるため、8月中ぐらいが目途と考えている。

<川島副座長>

公募委員サロンについては、もう少し具体的なイメージが必要である。

<竹内副座長>

公募委員サロンは必ず8月に開催する必要があるか。

<事務局>

6月頃に1回目の会議が開催される附属機関等が多く、みなさん意見交換がしやすく、2回目の会議に活かされるタイミングとして、8月という提案である。

<芝原委員>

公募委員の方への案内は、どれぐらい前にするのか。

<事務局>

2～3週間ぐらい前には案内したい。

<壬生座長>

1箇月ぐらいはあった方がいい。そのため、公募委員サロンを行う1箇月ぐらい前には、フォーラム会議を開催し意見交換してはどうか。

<兼松委員>

年に2回ということだが、もっと多くてもいいのではないか。

何が目的かによるが、「市民公募委員同士で集まろうよ」というのが、場を用意しないと成り立たないよりは、「毎月、月末何曜日に、ここで飲んです」というような、市民公募委員の人がいつでも集まれるような形もあり得る。この形だと参加者は10人ぐらいかもしれないが、ざっくばらんな意見交換ができると思う。

今、仲良くなることと対話をする事の両方をやろうとしている。市がそういった場を用意するのは難しいかもしれないが、仲良くなるだけの場でもいいと思う。

<事務局>

外部講師について、永橋前座長がいいと思うが、いかがか。

<竹内副座長>

異論ない。今回は、講師を永橋前座長にお願いするということだけ決めて、詳細は永橋前座長と相談してはどうか。

<事務局>

公募委員サロンを8月下旬か9月に設定させていただき、その1か月前辺りにフォーラムの会議を設定させていただく。

6 報告事項

報告事項（1）新たに設置された附属機関等について

<壬生座長>

次に報告事項について、事務局から説明をお願いしたい。

<事務局>

（資料5「新たに設置された附属機関等に係る市民協働政策推進室の協議結果（一覧）」）

附属機関等が適切に公開されているか。また、附属機関等に公募委員の方が選任されているか。このことを確認いただくこともフォーラムの重要な役割の一つである。

<芝原委員>

以前はもっと細かい情報が記載されていたが、フォーマットを変更したのか。公募委員の人数が何人とか、そういったところには、意見はもう求めないということか。

<事務局>

以前のフォーマットは、非常に多くの情報が記載されており、見にくいため、去年の途中からフォーマットを変更し、会議の公開と公募委員の有無に限って記載している。

<樋口委員>

私の認識では、抜けている附属機関等があると思うが。

<事務局>

前回の会議以降に新設された附属機関等を記載しているが、持ち帰って確認する。

<樋口委員>

各附属機関の公募委員の応募人数と実際の委員の人数を記載してもらおうと、市民がどれだけ関心を持ったのかが分かるため、記載してもらいたい。また、新設でなくても、新たに公募委員を選任することになった附属機関等があれば、その情報も記載してもらいたい。

<竹内副座長>

新しく設置された附属機関について公募委員の有無を確認することと、公募にどれだけ手が挙がるかということは切り分けて議論する必要がある。附属機関等の全てについて、応募の状況を議論するのは大変であるため、附属機関等の状況を分析する段階で議論すればどうか。

<樋口委員>

その方向でよい。

<竹内副座長>

樋口委員がおっしゃった論点は、皆さん納得されたと思うので、提示するタイミングは、事務局で調整をお願いしたい。

報告事項（２）その他

<事務局>

資料6，7は、市民協働推進担当において実施する事業についての資料等である。

資料8は、それ以外の市民参加に関係する新しい事業・取組等である。

<壬生座長>

これで、本日の議題・報告事項は全て終了である。皆さん、ありがとうございました。

7 閉会

■傍聴者の意見

<壬生座長>

傍聴の方から、コメント・感想を御一人ずついただきたい。

<傍聴者1>

市民にとって難しい内容がいっぱい出てきているので、もっとわかりやすい言葉、理解しやすい表現をしていただかないと、市民からすると何をしているのかということすらわからない。そうすると、敷居が高くなるので、そのあたりも検討いただければとおもう。

<傍聴者2（元フォーラム委員）>

私が初めて公募委員として参加した時に感じた緊張感や、何をしたいのか分からない感じなどが、ひしひしと伝わってきて、思い出しながら聞いていた。意見交換の活発なフォーラムなので、ぜひ、皆さん気持ちをほぐしていただいて、活発な意見交換をして楽しいフォーラムを作ってください、京都市の活性につなげていただきたい。

<傍聴者 3>

久しぶりに傍聴させていただき、面白かったが、「初めての人は何していいか分からない」ということを数年前も言っていた。特に市民公募委員は市民参加のことをわかって応募して来ているにも関わらず、分からないと言うのは違和感を感じる。

<傍聴者 4（前市民協働課長）>

傍聴席から見ると、こういう風にフォーラムを見れるんだとわかった。

■YouTube, ツイッターの反応について

<壬生座長>

ユーチューブ・ツイッターの発言状況はいかがか。

<事務局>

ユーチューブの中継は今2人の方にご覧いただいている。

ツイッターへの反応は、中継中ではなかった。

<壬生座長>

本日はこれで閉会とさせていただきます。委員の皆様、ありがとうございました。傍聴の皆様もお疲れ様でした。

以上